

「どこでもドア」としての陸前高田グローバルキャンパス

Rikuzentakata Global Campus as the Door to the everywhere

五味壮平^{1,2,3}

¹ 岩手大学人文社会科学部 ² 岩手大学三陸復興推進・地域創生推進機構

³ 陸前高田グローバルキャンパス運営機構

概要: 陸前高田グローバルキャンパスが開設されて約一年が経過しようとしているが、本稿ではこれまでの利用状況について簡単にまとめたあと、同キャンパスの存在価値をより高めていくための方向性について考察する。同キャンパスに関わり得るステイクホルダーについて整理したうえで、それぞれのステイクホルダーに対してキャンパスが提供し得る潜在的な価値や意義についてまとめる。ステイクホルダー間に相互作用が発生し、その相互作用がそれぞれにとって付加価値を提供するような状況が理想的であると考え、そのために必要な条件を検討する。グローバルキャンパスが理想的に活用されている状況を「どこでもドア」の比喻を用いて表現することを試みる。

abstract: In this article, we consider how to enhance the existence value of the Rikuzentakata Global Campus. We use the metaphor of the “door to everywhere” as an ideal way of existence of the campus.

1. はじめに

陸前高田グローバルキャンパス（愛称：たかたのゆめキャンパス）が2017年4月25日に開設されて以来、2017年度内の同施設の利用者は4000名を超える見通しとなり（岩手日報、2018）、まずは順調な滑り出しを見せているといっていよう。2017年度内に開催された陸前高田グローバルキャンパス関連イベントとしては、例えば、立教大学河野研究室と岩手大学によって実施された合同哲学カフェ、「陸前高田グローバルセミナー2017」（ハーバード大学と岩手大学大学院生とのジョイントプログラム）、岩手大の有志団体岩大 E_code 主催「あがってかだって大作戦 I-IV」（市民と大学生の交流の場づくり）、立教大学「陸前高田プロジェクト」（立教大学とスタンフォード大学の合同フィールドワーク）、関西大学主催、マルゴト陸前高田のコーディネイトのもとで実施された「国際ジョイント PBL プログラム」（関西大学とメキシコ、ベトナム、関西大学の学生のフィールドワーク）、復興庁岩手復興局主催「結の場」（地元企業と支援意思のある企業のマッチングの場の提供）、「陸前高田アートプロジェクト」（就労支援施設あすなろホーム利用者と岩手大学で特別支援教育を学ぶ学生たちとの共同アート活動）、COC+ふるさとといわてプロジェクトの事業としての「アバッセたかた専門店街&図書館紹介プロジェクト」（岩手大学、岩手県立大学、明治学院大学によるアバッセ入居店舗へのインタビューと情報発信）、立教大学スタディツアー（立教大学の留学生と日本人学生のジョイントプログラム）、立教大学主催シンポジウム「高田から世界を考える～難民の世紀に生きる私たち～」、2月に実施予定の岩手日報社企画の防災プログラム「いざ・トレ in 陸前高田」、そして今回行われる「陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2018」などなど、運営主体である立教大学、岩手大学はもちろん、多様な主体による様々な取組が行われてきた。地元団体の定期的な利用も増加している。

利用が広がる中、それでもまだ、この施設が地元、あるいは外部の人たちに十分に認知されているとは言えない。また、この施設がどのような施設なのか、誰にとってもわかりやすく提示されているとも言えないだろう。この施設の持つ潜在的なポテンシャルをさらに引き出すことを考えていくべきであろう。

そうした現状を踏まえ、本稿では陸前高田グローバルキャンパスが将来的にどのような存在であるべきかについての考察を行い、将来イメージを展望したい。なお本稿は、本大学卒業生越戸浩貴氏との議論に多くを触発されている。また陸前高田グローバルキャンパス運営機構役員会、岩手大学陸前高田グローバルキャンパス推進室会議等における関係者とのこれまでの議論もおおいに参考になっている。ただし、現時点ではこれらの会議における了解事項というよりは私的な考察にとどまるものである。

2. 陸前高田グローバルキャンパスのステイクホルダー

陸前高田グローバルキャンパスが単なる貸し空間にとどまるようであれば、その存在意義は次第に薄れていくであろう。陸前高田市周辺だけでも、コミュニティホールに加え、各地区のコミュニティセンターなど、市民や市外団体が借りることのできる施設は少なくなく、またまちづくりの進行に伴い増加している。同キャンパスが潜在的なポテンシャルを十分に発揮し、必然的存在になり、持続可能性を高めていくためには、このキャンパスに関わるステイクホルダー（あるいは潜在的利用者／受益者）それぞれにとっての価値を最大化することが必要となる。そこで、まずは同キャンパスのステイクホルダーについて整理してみたい。

主要なステイクホルダーとしては、1）陸前高田、およびその周辺市町村の住民・団体、2）陸前高田市（行政）、3）陸前高田や気仙地域を訪問する国内外の大学関係者、4）震災後の同士の経験を知り、防災・まちづくりについて学びたいと考える人々、そして5）運営主体としての岩手大学と立教大学が挙げられる。もちろん、それ以外にも利用者は存在するであろうが、まずはこれらのステイクホルダーに対して、それぞれどのような価値を提供で

きるかを考えたい。

まずは1) 陸前高田市民・団体に対してであるが、キャンパスがもたらし得る代表的な価値としては、1 a) 大学関係者や大学の持つ技術や知識との接続面となり、地元の問題発掘、問題解決の機会が提供されること、1 b) キャンパスが大学生世代の若者が集う場所となり、そのエネルギーが市民にも伝播し、地域の活力の向上がもたらされること、そして1 c) 生涯学習の場として機能することなどが挙げられるだろう。2) 陸前高田市（行政）に対しては、2 a) このキャンパスが存在することにより実質的な交流人口が増えること、2 b) このキャンパスが震災後にできた（とくに国内外との大学関係者との）交流をより長く継続、あるいは強化する拠点となること、2 c) ここを活用したことをきっかけとする移住者や定住者がうまれること、2 d) 震災とその後の復興プロセスにおいて同市や市民が経験した知見を「知恵」として体系的にまとめる拠点として機能すること、2 e) 2 d) で得られた知恵を広く国内や世界に発信することを通して、陸前高田や三陸の存在意義の向上に貢献することなどが挙げられるだろう。3) 陸前高田や気仙地域を訪問する国内外の大学関係者にとっては、3 a) 震災から時間が経ち、資金的あるいは目的的に、陸前高田を訪問する必然性がどうしても薄れていくなかで、同市、同地域への訪問の価値を高め、必然性を見つけられる空間として機能することがキャンパスの提供し得る最大の価値であろう。4) 震災後の同士の経験を知り、防災・まちづくりについて学びたいと考える人々にとっては、4 a) 防災や復興まちづくりに関する高度で多様な学修プログラムが受けられる空間であり、窓口として機能すること、が望まれるであろう。最後に5) 運営主体の岩手大学や立教大学にとってであるが、5 a) ほかの場所では得られない学びの場として機能すること、5 b) 戦略的拠点として機能すること、5 c) 両大学の研究者が研究上のユニークな素材を得られる場として機能すること、5 d) 大学の地域貢献のフィールドとして機能することなどが挙げられるだろう。ただし、地元国立大学である岩手大学と東京の私立大学である立教大学とは同キャンパスの意味付けの重心が微妙に異なってくるのは自然なことであろう。また大学運営の視点から見た場合（主として5 b) 5 d)）と、個々の教員・研究者の視点から見た場合（5 a)、5 c)）とでも、その意義は異なってくる。

3. ステイクホルダー間の相互作用による付加価値

2章では、それぞれのステイクホルダーに対して、陸前高田グローバルキャンパスが提供し得る価値について整理した。もちろん、これらが現実化するかどうかは予算や人的資源によるところが大きい。運営側の岩手大学や立教大学が他主体にサービスを提供するという発想だけでは、どうしても限界がでてくるし、両大学にとってグローバルキャンパスの意義が限定されたものとなりかねない。限られた資源のもとで運営を行い、かつ存在意義を高めていく上では、各種ステイクホルダーにとっての価値が調和的に提供されることが重要であろう。すなわち、キャンパスの利用主体間に相互作用が生まれ、お互いに価値を提供しあうような状況、それがこのキャンパスがもたらし得る理想的かつ効果的な状況であると考えられる。利用主体それぞれがこの空間で自分たちの活動を粛々と行うのではなく、その活動が別の主体の活動に影響を与えたり、あるいは逆に受けたりする。それが相互の活動の付加価値となることを期待するのである。

一つの例を考えよう。A 大学の教員が、学生数名を連れてボランティア活動のために陸前高田を訪問していた。日程の一部に空きが生じた。そこでキャンパスを訪問すると、立教大学の陸前高田プロジェクトが実施されており、スタンフォード大学の学生と立教大学の学生が市民の人たちをも交えた共同ワークショップが実施されていた。A 大学の学生たちもそこにまじって、過去の自分たちの経験を踏まえて、ワークショップで新鮮なアイデアを提供し、市民+A 大学+立教大学の共同プロジェクトが生まれることになった……。これは架空の例であるが、実際、これに近い状況は過去たびたび発生している。

利用主体間の相互作用による付加価値の発生は、開設前から関係者の間である程度意識されていたことではあるが、こうした展開がより頻繁に、有機的に、場合によっては必然的に起こるようにするために運営側として考えるべきことは、1) ステイクホルダー同士の関係性をより緊密にする機会を提供すること、2) 各ステイクホルダーの活動を視覚化し、ステイクホルダー同士で活動状況や予定を把握、確認できるようにすること、3) ステイクホルダーがほかの主体とのジョイントの可能性を相談できるコンサルテーション機能をキャンパスが備えること、などであろう。1) については、本シンポジウムはステイクホルダー間のネットワークを構築・強化していくための試みである。また2) については、ウェブサイト (<https://rtgc.jp/>) で他主体の利用予定が閲覧できるようになっている。しかし、いずれもまだまだ展開の余地がある。また3) については、今後より積極的に検討していくべきだと考えられる。

4. 「どこでもドア」としての陸前高田グローバルキャンパス

本稿では、陸前高田グローバルキャンパスの意義を今後さらに高めていくための方法について考察した。

最後に、キャンパスの在り方に関する象徴的比喩として「どこでもドアとしての陸前高田グローバルキャンパス」という表現を提案してみたい。説明不要であろうが、「どこでもドア」は国民的マンガである「ドラえもん」に登場する SF 的な道具である。このドアを通り抜けることで、あらゆる場所に瞬時に移動できる。ドラえもんの登場人物たちはこのドアを通り抜けた先々でさまざまな体験をすることになる。

例えば市外の大学に所属する利用者が陸前高田グローバルキャンパスというドアを潜り抜けると、その先には事前の想像を超えた異世界が「必ず」広がっている。その異世界とは、自分たちとまったく違う環境で学ぶ大学生であったり、外国の生活や文化であったり、地域性豊かな陸前高田の地域コミュニティや人情味あふれる人々、そして地域に息づく文化であったりする。ドアを開けるたびに異なる世界が広がっている。そしてその異世界が、高田への訪問体験を、あるいは学びの体験をきわめて豊かなものにしてくれる。こうなれば、大学関係者は頻繁に陸前高田を訪問する大きな意義を見出すことになるであろう。地元市民にとっては、都会の若者や海外の若者や研究者がドアを通りぬけてやってくる。キャンパスに行くと若い息吹に触れることができる。これもまた異世界との遭遇

体験とっていいだろう。そんな中で、ときに地域の問題に対する本質的な解決のきっかけや必要な知的資源へのアクセス可能性がもたらされたりする。こうしたポジティブな循環が行政としての陸前高田市にとっても価値あるものであろうことは、2 章で述べた価値 2 a)～2 e)を振り返ってみても明らかなことであろう。こうした好循環の形成は、拡大コミュニティ形成（五味他 2017, 五味 2017）のためのしくみとしても一般化できるものになるのではないだろうか。

いずれにしろ、陸前高田グローバルキャンパスは利用者の方々のニーズや希望を吸い上げながら成長し続けていくべき施設である。本稿が、同キャンパスの理想的な姿に関する議論やこうであってほしいという要望がうまれる一助となればと考えている。

参考文献

五味壮平 (2017) 「拡大コミュニティと「思民」についての考察 ～陸前高田での実践を踏まえて～」、『地域デザイン学会第 6 回全国大会 予稿集』, pp. 64-67.

五味壮平他 (2017) 「岩大 E_code プロジェクトについて」『陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2017 論文集』, 79-82 ページ http://rtgc.sakura.ne.jp/wp-content/uploads/2017/04/Symposium2017_5.pdf

岩手日報 (2018) 2018 年 1 月 7 日付 新聞記事

著者紹介

五味壮平：岩手大学教授。人文社会科学部・三陸復興・地域創生研究センター・地域防災研究センター。専門は情報学。2012 年より陸前高田にて岩大 E_code プロジェクトを開始。2014 年から高田松原津波復興祈念公園 協働デザインワーキンググループ、2015 年から「陸前高田市まち・ひと・しごと総合戦略策定会議委員」、2017 年から陸前高田グローバルキャンパス運営機構等に従事。

住所：〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-34, E-mail:gomi@iwate-u.ac.jp

